

勤勞

鍛鍊

勤勞隨想 山昇

夏から秋に掛けての自然界には、何かしら人生一路の旅に温順な雰囲気と興へてゐる。

最初、私は鶴嘴で、上部の硬い土を堀り出した。作業は壕堀りである。眞面目に働き出す自分の姿には、苦笑せざるを得なかつた。

みえて、側の友人は「おい、仲々腰つきがよいぜ」と笑つて言ふ、「そろそろさ」と言つて、眞面目くさる私の顔がなほ面白いらしい。然し私の返答に對しては、その全部まで理解してくれなかつたらしい。

鶴嘴を打込むごとに汗が、今堀つたばかりの土に落ちてにじむ。此の苦しさの中から、惻々として人の心を動かす力を持つ情調が湧いて来る。私の心は、何時の間にか朗らかに萌木色に躍り出す。鶴嘴は氣持良く突き刺さる。そして土は飴

でも割り起すやうに堀れて行く。

「交替！」と號令が掛かる。先づ休憩と、礫の頭に腰をおろして、土を眺めながら自分がかう想つた。

一塊の土でも、一本の草でも、相對する人の心如何によつて、大宇宙の生命が象徵される。アイトマンとブラーフマンが一如であると云ふのは、なんでも此の邊のことかも知れん。徳富氏の「みづのたはごと」に出る一節に、我等は土より生れて、土に死ぬとか何んとか云つてある。その意味は今更に、人間の生涯を考へる時、よく味へる。

「おい、穴堀り講習をやつたらどうだい」「やつてもよい」笑つて答へたきり黙つて、目の前を這ふ蟻を見つめてゐた。礫を歩み越へて行く。餌になりそうな物を見つけて與へてやつたけれども、全く別の方向に進む。喉けてもやはり駄目である。ちん——と、心に來るものがある。

つた。かうしてゐる間私の心は、大自然と道交する。そして私の宗教は、詩は、この心に生れてくる。

「作業交替!!」「おい、早くやらんか」と、先に尻を舉げた者が言ふ。私は第三者から見るとき、いやいや始める態にみえたかも知れぬ。今度は、唐鏝で堀り出した。机に向つてゐる時と違つて、別様のリズムが流れる。手は機械的に動く。私の心は更に進んだ。

フランス哲人グウルモンであつたと思ふ。人間に一番大切な觀念を自得するには、園藝に越すものはない。このことによつて、僥倖を願ふ心がなくなり、報酬が勞働に比例することを知り、堅忍と勞働の心が磨かれる、と云ふやうなことを言つてゐる。人間に一番大切な觀念を、私は見ずして見る。併し適中してゐるかどうかは斷じ難い。兎角このことは、理論を立て、合理的のもの考察する學生に、立派な信念を植附けると思ふ。

私の想ひは、ひたすらに自己の内奥へと走つてゐた。時々友達が私に相手になつたが、そのたびに笑を附して返した。

一體、勤勞は質實剛健な氣風を與へると共に、沒我共同の精神を生ましむるものであらう。しかし此等の精神は、登山に、行軍に、教練に、競技等と養ふ機會に手段は多くあるが、勤勞は何かしら一種の異様なものが感ぜられる。上調子に滑つて行かない。即ち人間に一番大切な觀念を自得せしめるのであらう。質實剛健な氣風は、滅亡ローマ帝國には存在しなかつたであらうし、若しこれがあれば漢・唐・宋・明の倒れるを維持する大柱となつたものと信ぜられる。ドイツは青年にこれを把握せしめて今日の發展を來たしたのである。鎌倉時代を特色づけたものは、武士道に養はれた此の氣風であり、關東の令、山の如しとは、實に此處に俟つたのだ。そして此の精神は上古の社會にも見られる如く國史の底に流れて今日まで國民精神として、その生命を維持して來たのだ。

私は山科方面に行軍した時、百姓の老人が私に、土といふものは有難いものです、かうして働けば作物が出来る、結構なものです、わしは此の田畑から作物が

生れて來ると思つて育て上げてゐます、と言つてゐたが、沒我共同の精神と質實剛健の氣風を養ふ勤勞は、ものを創造するのでなく、生んで行くのであり、出来上がったと思ふ防空壕は生れたのである。最近、古事記の註釋書がよく店頭に置かれてゐるのを見たから、何氣なしに買つて來て讀んだ中に「生む」の精神につき書かれてあり、それを見て此の老人を遙かに尊敬した。實に日本文化は生命文化である。土を相手にする勤勞は、常に人をして報恩感謝の念を湧かし、純情な人を築き上げて行くであらう。民謡はよくこれを語つてゐる。トルストイは、勞働に接觸なき人は恐らくその人の全生活に或種の報を齎らさないであらうと云つてゐる。土を相手にする農業は交換・企業の經濟の如く營利の觀念を起ささず寧ろ自然に接觸して、此の種の勤勞を無視する者の觸れ得ないやうな健全な喜びと苦しさを感じしめ、利己的なことを考へせしめないであらう。このやうにみてくると總べての面からして土を離れた文化は本質的に人間に幸福を與へないと言

ひ得る。
穴堀りと呼ばれた自分は、このやうに身の程を忘れたことを思念しつゝ仕事を續けたのである。

奉 仕 堀 記 隆 靜

七月廿四日。こゝは奥多摩峽谷の中心をなす町で地方の人々は素朴そのもので當に太古の仙境である。吊橋を渡つて胸突く様な坂道を

を登り目的の思源寮に着いた。人里離れた山の中腹に立つた新築間もない寮である。午後三時全員集合、入寮式が行はれ一同文部大臣及び道場長の訓示に感奮する。

七月廿五日。せゝらぎの音と共に眼を醒ます。今日から日課通りに諸行事が行はれる。先づ五時起床、五時三十分點呼續いて山麓の氷川町まで駈足、氷川神社にて木劍體操をやり奥多摩の清流に丸裸になつて禪をして一切の汚れを除く。朝の體操は苦しいけれども楽しみなものである。それは人里離れた山腹から婆娑の風に當るからである。禪の後、身も心も